

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

博物館で、 恐竜^{きょうりゅう}を見るように

大学卒業後、就職もままならず大学院に行き、32歳で中学校教員になった。子どもが大好きだったから、退職まで担任と授業を続けた。ところが50歳のとき、突然、人権・部落問題の大学夜間講義の依頼が来た。依頼主は人権・同和教育の重鎮である林力先生だった。退職までの10年間、昼は子どもたちとふれあい、夜は講義のために大学へ通った。退職後は、いくつかの大学の講義を担当することになったが、学生たちは小学校から高校までに人権・同和教育や社会科で同和教育を学んだはずなのに、ほとんど記憶に残っていない。それどころか「あの人たちは団結が好き」「親から、結婚するときは〇〇と言われている」など、強いマイナスイメージをもっていることが、講義の事前アンケートや講義を通じて分かってきた。

私たちが数十年取り組んできた人権・同和教育の中身が問われる貴重な経験だった。

そうした中、いわゆる同和地区出身の母親のことをひたすら隠し恨んできたことや、結婚差別のただ中で頑張っている自分のことを、ミニレポートな

とに少しずつ書いてくれる学生もいた。その学生は、後に結婚して子どもを産み、今も元気に暮らしている。

私は、現役を退いた現在は福岡県人権研究所の理事を務めている。研究所は、各部会に分かれて、研修会やイベントなどを開催している。3月28日、部落問題部会の学習会があり、県内各地から20人あまりが集まった。中学校社会科教師による江戸時代の身分制度についての実践発表は、硬直した上下関係ではなく、被差別民と町人の触れあいや被差別民の中に名医がいて平民にすがるよう歎願（たんがん）が出たことなど、被差別身分の生活が浮かんできると、被差別身分のとらえ方と、日々の生産と労働の姿が分かる内容だった。最後に、「命や人権にかかわる学習で一番大切なことは、学び合う人の立ち位置（自分）がどこに立っているのかという自覚（じかく）である」という提起がなされた。そのとき、「私は今まで、博物館で展示された恐竜を見るように、部落問題の講義を聞いてきた」という学生の鋭い気づきを思い出した。

傍観者として「自分には関係ない」と距離を置くのではなく、自分事として考えることで、部落問題をはじめ、さまざまな人権問題が身近に迫ってくる。

問 教育政策課

厳しい差別をうけながら

小学校6年生の社会の教科書には、江戸時代に被差別の立場に置かれた人々のことを次のように記載しています。

「厳しい差別をうけながらも、荒地を耕して年貢を納めたり、すぐれた技術を使って人々の生活に必要な用具をつくったり、役人のもとで治安維持をになったりして社会を支えました。また、古くから伝わる芸能をさかんにして、後の文化にも大きな影響を与えました」

本市では、社会科学習カリキュラムを作成し、教科書の記述を補完する具体的資料や絵図などを用いて、部落問題について学んでいます。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。